広告　企画・制作　読売新聞社広告局

復興フォーラム2014「被災地の看護は、いま」

主催：日本看護協会　共催：読売新聞東京本社

災害時の体験を、看護の新たな可能性へ

2011年3月11日の東日本大震災から3年。日本看護協会の東日本大震災復興支援事業 復興フォーラム2014「被災地の看護は、いま」が、2月11日、よみうりホール（東京都千代田区）にて開催されました。

大勢の来場者で盛況となったフォーラムでは、ともに宮城県仙台市出身で、3年前から現在まで精力的に支援活動を継続しているお笑いコンビ、「サンドウィッチマン」のお2人によるトークショー、被災地でさまざまな活動をしている看護職によるリレートークが行われ、看護の役割や新たな可能性を発信する機会になりました。

最後に、一日も早い被災地の復興を願い、復興支援ソング「花は咲く」を合唱。

ロビーでは被災地での災害支援活動に関するパネル展示を行い、来場した方々も興味深く見入っていました。

【開会あいさつ】災害時の対応を共有し、新しい看護の力へ

公益社団法人 日本看護協会
会長 坂本 すが

このフォーラムは、看護の目を通して見える被災地域の現状と課題を皆さまと共有し、今後につなげることを目的として企画しました。

私は東日本大震災後、何度も被災地の医療現場や訪問看護ステーション、介護施設などを訪れてきました。そこで自らも被災者である保健師、助産師、看護師をはじめとする医療関係者が、人々の命と健康を守り、地域を再生し、看護の使命を果たそうと懸命に働き続ける姿に出会いました。今も一人一人が力を合わせ、復興の歩みを進めています。しかし、いまだに多くの方が避難生活を余儀なくされており、継続した支援がこれから先も必要です。

復興とは、健康な人も病める人もその人らしく健やかな生活を取り戻すこと。道はまだ半ばです。今こそ、看護の力が試されています。あのとき何が起きたのかを知り、これから看護職は、何をしていくことが必要なのか、皆さまと一緒に看護の未来を考え、行動につなげていきましょう。

【トークショー】「被災地での支援活動と復興への思い」サンドウィッチマン（お笑いコンビ）

震災3年目の現在まで積極的な支援活動を続けるお2人、東北支援に関わったこれまでの思いと展望を、笑いを交えつつ語っていただきました。

"僕たちは生かされただから今できることを"

——今も芸能活動と共に募金やチャリティを続けられていますね。

伊達　震災当日は気仙沼でロケ中でした。高台に避難して助かりましたが、家や人や車が流されるのを目の当たりにしたので、僕らは本当に生かされた。これは自分たちでできることをしなければ"と思いました。被災した両親が自ら炊き出しをしていたので後ろ髪を引かれる思いでしたが、「お前たちは伝える仕事をしているのだから東京でそれを続けなさい」と。1年目はお笑いライブも封印し、募金活動を行いました。最初のころは、音楽で被災地を元気づけようという活動が多かった。人を癒す歌の力はすごいと思いました。

——3年経ちますが被災地の変化は？

伊達　まだ仮設住宅に住んでいる方もいらっしゃいますが、最初のころはあの日の話はしたくないという方が多かったのが、今は話してくれるようになりました。

富澤　3年という月日は大きいですね。僕らは松島や気仙沼の観光大使をしています。東北には、おいしいものがたくさんあるので全国から観光に来てほしいですね。

3年でも5年でも、東北の現状を伝え続けたい

——被災地で印象に残った出会いをお聞かせください。

伊達　震災直後で高速道路が封鎖されている中、千葉県の男性がお給料一カ月分の食料や必需品を自分の軽トラックに積み込んでボランティアに来てくれました。親戚や知り合いがいるわけでもないのに、「よければ使ってください」とトラックも置いていってくれて…。いまだにありますよ、袖ケ浦ナンバーの軽トラック。

富澤　あの人どうやって帰ったんだろう？　まだ南三陸のどこかでテント張っていたりして（笑）

伊達　そのほかにも、「アラスカまで流された店名入りの浮きが手元に戻ってきたのをきっかけに店を再開した南三陸の居酒屋さんなど、思い出に残る方はたくさんいます。

富澤　気仙沼にも被災した海の近くで店を再開した方がいます。「生まれ育った場所で海と共に生きようと頑張っている人たちのために、同じ場所でないと意味がない」とおっしゃって、本当に強い人たちだと思います。

伊達　宮城の桂島では、青年団の方が島中のお年寄りを把握していたので地震の直後に人残らずトラックの荷台に乗せて避難させることができた。結果、誰も亡くならずに済んだそうです。

——コミュニティがしっかりしていると、復興にも一丸で取り組めますね。被災地で看護職の方にお会いになりましたか？

伊達　もちろんです。震災直後は四国の看護師さんの団体に空港でご一緒しましたし、災害看護のエキスパートの方が石巻の病院に入ってくれました。今も学生ボランティアの方がたくさん頑張ってくれています。

——今後の活動は？

伊達　昨年、全国ツアーお笑いライブを福島県のいわき市で行いました。とても喜んでいただき終演後に涙を流す方もいて本当に嬉しかったです。3年でも5年でもこの活動を継続し、東北の現状を伝えていきたいです。

——笑いは元気の源と言います。

伊達　作り笑いでも効果があるらしいですよ。

富澤　皆さん、ぜひ作り笑いしましょう！（笑）

【リレートーク】"あの日"を伝えることから始まる、看護の未来

震災当日から現在まで、被災地の医療現場では何が起き、どのように看護を続けているのでしょうか。「被災地の看護は、いま」をテーマに、看護職が当時を振り返り、これまでの取り組み、今後への熱い思いをリレートークで語りました。

知恵を出し合って守り抜いた非常事態でのお産

医療法人社団スズキ病院
スズキ記念病院 看護部長
八木橋 香津代 氏

自家発電システムも破損した中、私たちの病院が震災後の非常事態の中で扱ったお産は29件。被災中でもお産は始まり、進行していきます。震災当日は、点滴用のバッテリーに車やパソコンの非常電源を使い、暖房の代わりにポットのお湯と使い捨て手袋で即席湯たんぽを作成。その夜、駆け込んできた妊婦さんには、「ライトで全部見えているし、赤ちゃんも元気で頑張っていますよ」と励まし続け、ヘルメットにつけたLEDランプを頼りに無事お産を行いました。

産科医療に関わる者は、どんな状況でも安全なお産ができるよう対策を講じることが欠かせません。そして妊産婦を不安にさせないこと、お母さんと赤ちゃんの命を守ることは、私たち看護職の責務です。

公的支援が入るまで「命をつなぐ」そのための備えを

社会福祉法人キングス・ガーデン宮城
南三陸厚生園看護ケアセンター 所長
千葉 美由紀 氏

地震、大津波、広域火災に見舞われた私たちは、職場の建物や車、家、30名の利用者さんなど多くのものを失いました。しかしスタッフ全員の命、訪問看護師としての使命感、唯一持って逃げた訪問バッグは失わずにすんだのです。訪問に行くか、行かないかではなく、どう行くか。私たちに迷いはなく、震災翌日には徒歩で避難所を訪問し安否確認を開始、6日後には訪問を再開しました。

災害時は救急車がたどり着けないこともあります。特に在宅で医療機器をお使いの場合、日ごろからライフラインが途絶えた時や公的支援が入るまでを想定し、充電式、手動式、インバーターなど、複数の電源確保を準備することが最も重要です。

私たち訪問看護師は、日ごろの備えを見直し、これからも地域の利用者、家族に寄り添い、安心な暮らしを支えていきたいです。

「相馬灯プロジェクト」新人看護職員集合研修の仕組みづくり

相馬看護専門学校 副校長・
福島県看護協会 相双支部長
堀内 由美 氏

「相馬灯プロジェクト」は、近隣の病院が団結し新人看護職を育成しようと2010年に始動した集合研修です。これからという時に震災が発生し、福島県相双地方は地震、津波に加え、原発事故の被害も受けました。避難や退職により新人看護職も激減。しかし震災当日「何かお手伝いできませんか？」と、4月入職予定の新人女性が声をかけてくれたことがきっかけとなり、研修を再開しました。

看護学生の地元への就職率は震災後3割前後まで下がりましたが、2014年度は6割近くが相馬地方に就職予定です。どのような状況下でも毅然とした態度で仕事に臨める看護職が育ち、患者さんと相馬地方の灯りとなることを願い、プロジェクトを続けたいと思います。

「見える被災」と「見えない被災」に向き合い続ける

岩手医科大学
いわて東北メディカル・メガバンク機構
臨床研究・疫学研究部門 特命助教
佐々木 亮平 氏

岩手県大船渡保健所の保健師だった私は、人事交流で陸前高田市に派遣され地震の前年まで過ごしました。保健師は地域で活動する看護職です。災害時だけでなく中長期的に地域住民の健康を守る仕事ですが、今回の震災で保健師の同僚5人を亡くしました。被災後、全国の保健師チームと共に全戸訪問の健康生活調査などを行い、「見える被災＝仮設住宅」だけでなく、見えない被災＝直接的被災はない地域での孤立」を防ぐ必要を実感しています。

災害対応は「できる人ができることをやる」です。地域での居場所づくりに向けはまってけらいんかだってけらいん（集まってお話しましょう）」を合言葉に、地域でできることをつずつ実践中です。新たなながりは街を活性化させます。4年目を迎える今だからこそ、同じ時代を生きる私たちの行動に未来の答えがあると思います。

命をつなぐお手伝いをする、それが看護です

公益社団法人 日本看護協会
常任理事
中板 育美

「どうもこうも、何が何だか。震災数日後にようやく連絡の取れた保健師の第一声です。混乱を極めたあの大災害の中でも住民のそばを離れないと決め、多くの看護職たちが現地に残り懸命の活動を行いました。

自然の猛威は私たちから大切なものを奪い、生き残った者に「もっと何ができなかったのか」と後悔や罪の意識を背負わせます。その解消はたやすくはありません。しかし生き延びたからこそ、多くの命とも出会えます。看護は、命が動く瞬間に出会い、命をつなぐお手伝いをします。看護の使命から生まれた行動と3年の月日がもたらしたものをより多くの人に伝え、看護の道を目指す若い芽が育ってくれることを願っています。

コーディネーター
読売新聞東京本社 編集局総務
南 砂

公益社団法人 日本看護協会　日本看護協会　検索　この広告に関するご意見・お問い合わせ → koho@nurse.or.jp

被災地では、引き続き看護職の力が必要とされています。被災地での就業を希望される方はお近くの都道府県看護協会、ナースセンターへご連絡いただくか、「e-ナースセンター」をご覧ください。
e-ナースセンター　https://www.nurse-center.net/